

## しろうとの木版画（93・11・16）

河原

勇（昭16・理乙）

みなさんがいつも話されるような高尚な、或いは本にも書けるような話はちよつと出来ませんけれども、私が版画を始めた経緯と云うか、それから版画の何を今やっているのか、版画はどうやってやるのかと云うような卑近な話をして、皆さんに興味を抱いて戴けたらと思って話をする事に決めました。それでは用意をするのにちよつと時間を戴きます。（暫くして）

お待たせしました。だいたい私が版画を始めたのは、年賀状を版画で作ろうと思ったのが元です。年賀状というのは、皆様が同様に感じられるかどうかは分かりませんが、大体この頃の年賀状は決りきった文句を印刷して、宛名を書いて投函する、受け取った方は名前だけぱつと見て後はおしまい。一年に一回の年賀状なので、もう少し心の籠ったものを作るのが本当じゃあないかなと思つたわけです。年賀状を貰つても全然面白くもない。『あ、彼はまだ生きていたなあ』と云う証しであるだけ、まあそれだけでも意味はあると思うのですけれども、『ああ成程、あの人

は今こんな事をやっているのか」と、ちよつと近況などが書いてあつたりなんかすると、面白いと云うか、非常に「ああ年賀状を戴いたなあ」と云う気がする訳です。文言の代りにひとつ年賀状に絵を描いてやろう。ところが絵を描くと云つても一枚一枚描くわけもゆかないし、私自身絵はあまり上手ではないので、それじゃあ版画でも彫つてやろうという事から始まった訳です。版画を彫つた年賀状を送ると割合反響がいいんですね。君の年賀状は毎年取つておいてあると云う人もいるので、折角、年賀状に版画を彫りだしたのなら、もう少し版画を本式に勉強してみようかなと思ひ出したのがそもそなんです。たまたま新聞で千葉の朝日カルチャーセンターで木版画の講座の募集をしているのを見ました。千葉の朝日カルチャーセンターが出来たのは四年程前で、私がそこで版画を習ひ始めたのは三年半程前からです。講義は一週間に一回あるので、毎週一回づつ千葉まで行つて、版画のやり方を基礎から教えて貰つております。ここに版画で作った年賀状が何枚ありますが、これを見て戴くと「ああ成程、三年もやれば少しは上手になるのだな」と云うことが分かると思います。

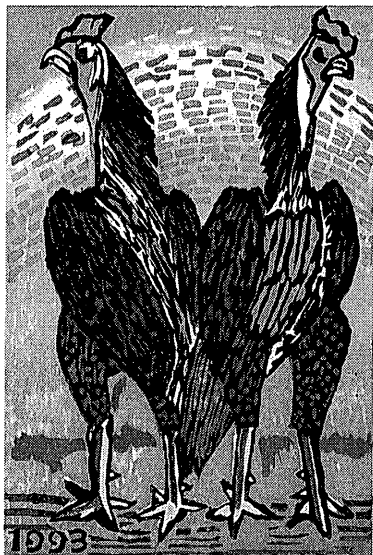
今行っている千葉の版画教室で毎年自前のカレンダーを作っております。版画教室のメンバーが十五・六人いて、六人で一組になつて、一月と二月、三月と四月とふた月ずつを一枚にして版画を描いて六枚一組のカレンダーを作るのです。ここにそのカレンダーをもつて来ておりますので御覧下さい。（カレンダーを見せて説明をする）。これは最初のカレンダー、これは二年目のカ



年賀状・版画を習う前（巳年）

レンダー、これが私が担当した分。これは今年の一九九三年のものです。またこれは試し刷りをしたところで、まだちょっと修正しなければなりません、来年のカレンダーです。少しずつまくなって来ております。カレンダーの版画は担当した各自が必要な枚数を刷って台紙に貼り付けてこういう風なカレンダーに仕上げ、年末の作品発表会の時に頒布するんです。一部一八〇〇円です。比較的評判が良くてすぐ売り切れるんです。（それは印刷してあるの、という質問に答えて）絵は全部一枚ずつ刷った生の版画です。

次にこの版画の年賀状は一九九〇年の頃の、未だ版画を習っていない時の年賀状で、NHKのテレビで版画の作り方を放送しているのを見て、あのようにして多色刷りをやるのかなどやって見たものです。それから一九九一年がこれで版画を習い始めた最初の年賀状です。一九九二年がこんなもの。一九九三年はこれで割合評判良くてですね、画家の渡辺さん（昭和一六年理甲）から「これは割合よ



く出来た」と褒めて戴いた。と云うような経過で結局本式に版画を始めた訳です。

版画を始めた理由のもっとも大きいものは、たまたまそれまでの仕事から全く退いて、会社の関係の仕事は全然やらなくなつた。何も仕事がなくなつて、これから何をしようかなと思つたのです。これから後、余つた時間を十年ばかりで何かやり甲斐のあることが出来なかつたかと考えました。

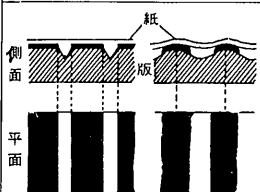
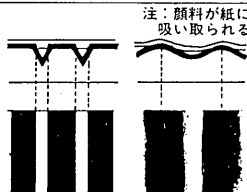
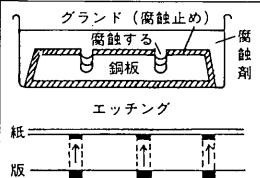
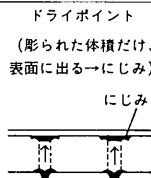
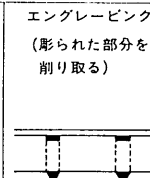
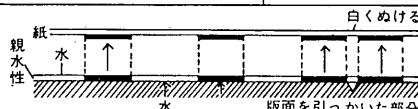
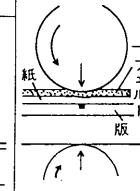
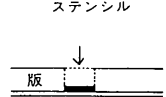
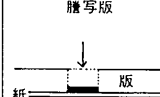
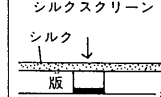
今迄一生やつて来たことといつたら、今になって考えればあまりたいした事をやっていない。しかも左脳の仕事ばかりやつて来た。それで最後にあと十年くらいは右脳を使うことをやってみよう。十年位あれば少しは何か出来るだろうと云うことも版画を始めた一つの理由なんです。版画を始めた頃に、渡辺さんに相談したと云うか、ちよつと話したら「お前そんな事はやめろ」と云われたのですね。「版画というのはそもそも絵じゃないんだ。あれはマスメディアの一つの手段であつて、描きなおしもきかんし、版画なんかやめた方がよい」とアドバイスを受けました。考えてみますと、私は渡辺さんのように絵が

上手でないので、少しは絵でない要素が入っている方がいいんじゃないか。版画だと、彫る仕事、刷る仕事と、いわゆる職人の仕事が入ってくる訳ですね。後で少しお話ししようと思うのですけれども、昔の浮世絵、これは皆様もご存知だと思いますが、浮世絵というのは絵は絵師が描くんですね。私が聞いたところでは、歌麿だとか北斎だとか、これはさらさらと絵を描くだけなんです。それで彫るのと刷るのは別の人がやるということなんです。もちろん肉筆の浮世絵は絵師本人が奇麗にみな描くのですが、浮世絵版画では絵師は版元から注文を受けると、注文のテーマに沿って版面にする原寸の大きさの下絵を描く。納得出来る下絵が出来ると、薄くて丈夫な薄美濃紙のような和紙を当てて墨でぐっと輪郭を描きます。これが版下絵で、墨線のほかは一切色をつけない。版下絵は版元に届けられ、版元から検閲に回される。検閲から帰った版下絵は版元から彫師に回される。彫師は版元が選び出します。彫師は絵師と打ち合わせをして先ず墨絵だけを彫ります。これで版木でもっとも重要な墨板が出来ます。出来上がった墨板を使って何枚かの墨刷絵を刷り上げ、また絵師に戻します。絵師はその絵をどう云う風な色に色付をしようかと考えて、この頭の部分は黒にしようと思うなら黒と、紅でさつと色づけをし、ここは黒と描く訳ですね。着物の赤いところはやはり紅で塗ってここは赤と書いて、一枚ずつ描いていく。そうすると同じ四色刷りなら四枚の墨絵が出来る事になります。そうしてその絵を再び彫師に渡すんです。と、彫師はその通りに一枚ずつ彫るのです。そこで四枚の版木を刷師に渡す。刷師は絵師と相談して、

この絵の色はどのような色調にし、濃さはどれくらいにしようなどという事を決め、刷師が刷る事になります。ですから絵師の絵から錦絵の版画が……（浮世絵のことを錦絵と云いますけれども）……奇麗に出来上がるには結局、彫師と刷師の腕が非常によくないとあんな絵は出来ない訳です。それをプロデュースするのは版元で、版元が彫師や刷師をみな選ぶのです。もちろん絵師も選ぶ。ですから版元というのは今でいえば映画のプロデューサーに当たる。版元が一番しっかりしていないといい絵が出来ません。もちろん鈴木春信だとか喜多川歌麿だとか広重だとか北斎だとかは、天才的な人ばかりですね。しかし、だいたい版画と云うか、いわゆる浮世絵と云うのは、芸術としてはなしにマス・メディアとして発達したものだそうです。これはたまたま本で読んで、その受け売りをしているわけで私自身が考えた事では勿論ありませんし、あるいは余り勉強していないので、間違ったことをたまに云うかも知れませんが、その辺はご容赦をお願いします。まあ、そんな事で版画を始めたんです。

版画と云うのは、今そこにお配りしたプリントを見て戴くと分かるのように、私がやっているのは凸版なんです。（「版画の形式」……木村一生氏著版画入門より……と云うプリントを配る）。木版画と云うのは凸版で、版画の中には凸版と、逆の凹版と、それから皆さんがいつもオフセットとかで見られるますけれども、あれは平版、平たい版と書きます、平たいものの上に絵を描くわけですね。それから孔版、孔（アナ）の版と書く、この四種類があり、皆さんはい

# 版種の原理とその印刷方法

|                                                                                                                                                             |                                                                                                       |                                                                                                                                         |                                                                                                                                                                                               |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 油性インクまたは絵の具による                                                                                                                                              |                                                                                                       | 水性顔料による                                                                                                                                 | 拓 摺 り                                                                                                                                                                                         |
|  <p>紙</p> <p>版</p> <p>側面</p> <p>平面</p>                                     |                                                                                                       |  <p>注：顔料が紙に吸い取られる</p>                                  | <p>油性顔料による（乾拓）</p> <p>紙</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・油性インクをローラーでころがす・クレヨン、クレパス、コンテでこする</li> </ul> <p>水性顔料による（湿拓）</p> <p>紙</p>                                                  |
| バレンまたはエッチングプレス機による                                                                                                                                          |                                                                                                       |                                                                                                                                         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・水分の少ない墨または絵の具をタンポでたたく</li> </ul>                                                                                                                      |
| 腐蝕剤によるもの                                                                                                                                                    |                                                                                                       | 腐蝕剤によらないもの                                                                                                                              |                                                                                                                                                                                               |
|  <p>グランド（腐蝕止め）</p> <p>腐蝕する銅板</p> <p>腐蝕剤</p> <p>エッチング</p> <p>紙</p> <p>版</p> |                                                                                                       | <p>ドライポイント</p> <p>（彫られた体積だけ、表面に出る→にじみ）</p> <p>にじみ</p>  | <p>エンレービング</p> <p>（彫られた部分を、削り取る）</p>                                                                         |
|  <p>紙</p> <p>水</p> <p>親水性</p> <p>白くぬける</p> <p>版面を引っかいた部分</p>               |                                                                                                       |  <p>エッチングプレス</p> <p>紙</p> <p>フェルト</p> <p>版</p>         |                                                                                                                                                                                               |
| ステンシル                                                                                                                                                       | 騰写版                                                                                                   | シルクスクリーン                                                                                                                                | リトグラフ用プレス                                                                                                                                                                                     |
|  <p>版</p>                                                                |  <p>紙</p> <p>版</p> |  <p>シルク</p> <p>版</p> <p>紙</p>                        |  <p>ティンパン</p> <p>あい紙</p> <p>紙</p> <p>版</p> <p>上から紙に写す</p> <p>シルク</p> <p>インク</p> <p>版</p> <p>台</p> <p>紙</p> |

など）。

## 版の形式

| 版形式 | 版 種 名                                                                                                                                          |                                                                                                                                                                                                                                  |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | 版の材質                                                                                                                                           | 製版方法                                                                                                                                                                                                                             |
| 凸 版 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・木版 { 板目木版<br/>木口木版</li> <li>・イモ版</li> <li>・ゴム版（リノリウム）</li> <li>・紙版</li> <li>・ひもその他実物を接着したもの</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>主<sup>おも</sup>に彫刻刀による</li> <li>平<sup>へ</sup>らな版に接着する</li> </ul>                                                                                                                           |
|     | ・拓本                                                                                                                                            |                                                                                                                                                                                                                                  |
| 凹 版 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・銅版</li> <li>・ジंक版（亜鉛版）</li> </ul>                                                                      | 腐蝕 <sup>くしょく</sup> 剤によるもの <ul style="list-style-type: none"> <li>・エッチング</li> <li>・アクワチント</li> </ul> 腐蝕 <sup>くしょく</sup> 剤によらないもの <ul style="list-style-type: none"> <li>・ドライポイント</li> <li>・メゾチント</li> <li>・エングレービングその他</li> </ul> |
| 平 版 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・石版</li> <li>・ジंक版（亜鉛版）</li> <li>・アルミ版</li> </ul>                                                       | <ul style="list-style-type: none"> <li>リトグラフ</li> </ul>                                                                                                                                                                          |
| 孔 版 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ステンシル</li> <li>・晒<sup>ひ</sup>写版</li> <li>・シルクスクリーン</li> </ul>                                          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・カッティング</li> <li>・写真製版</li> </ul>                                                                                                                                                         |
| 併用版 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとつの版を凸凹共、同時に印刷する（エッチングの1版多色刷り）</li> <li>・各版形式の2つ以上の版種を、ひとつの作品に併用する。</li> </ul>                        |                                                                                                                                                                                                                                  |

つも接しておられる絵の中には案外、版画が多いのですね。例えば、一番よくお目にかかるのはお札<sup>サツ</sup>で、これの元は銅版画だそうです。上の四種類のうちの凹版に当たります。これは銅版を彫る人が造幣局におりまして、（お札<sup>サツ</sup>を出して）このお札の図柄のこの顔の部分を誰が彫る、この草の模様の部分は誰が彫ると決まっているのだそうです。私達が子供の頃、少年倶楽部とか少年世界とか云う雑誌に色々絵を描いたおられた絵描きさんを覚えておられると思いますが、石井拍亭、ご存知ないですかね、それから鏗木清方とか。有名な絵描きさんですがね。石井拍亭のお父さんの石井鼎湖は大蔵省紙幣寮の中心的技術者でお札の絵を彫ったんだそうです。今も大蔵省でお札の模様を彫る人が決まっています、版を彫って印刷に回す。この紙幣は印刷ですけれども、元は銅版画だそうです。何人かが掛かってこれを彫っていると云う事です。

銅版画にも色々なやり方がありますが、エッチングと云うのは、よく磨いた銅版の面に普通蜜蝋とアスファルト、松ヤニなどで作ったグラントという防食用の塗料を引いて、その上にニードルで絵を描くのですね。絵を描いた銅版を薬品の中に漬けると絵の部分はニードルによって防食用の塗料が削り取られているので、その部分だけ銅版が腐食され、絵の通りにひっこむ訳です。そこで銅版の上のグラントや薬品を奇麗に拭き取って、その面に油性インクを刷り込んだうえで銅面を拭き取ると、腐食によってひっこんだところにインクが残ることになります。この銅版の上に紙を充ててプレスをかけると溝のインクが紙に付着して、ニードルで銅版の上に描いた通り

の絵が出来上がることになります。つまり、凹だところにインクを入れて刷るのが凹版です。これはヨーロッパで発達したもので、日本には江戸時代の終りに長崎を通じて入って来たようです。凸版と云うのは、私が今やっている木版画だとか、判子はんこがそうですね。それから篆刻、みな色が付く部分が出ているでしょう、これが凸版です。

それから孔版というのは、日本で昔から浴衣を染めたりする、捺染なせんですね。ステンシル、つまり型紙を切り取ってそこに塗料を塗ってそれで染める訳です。いわゆる孔の開いたところにインクが付くように刷るのがあな版、孔版であります。

平版と云うのは、石版刷りと云うのがありますが、これが平版です。今は石ではなくて、亜鉛版だとかアルミ版を使っています。これが今の印刷界では常套手段になっております。

ちょっと話が戻りますが（写真制版したシルクスクリーンの枠を見せて）これが孔版を写真制版によって制版したもので網のところは絹です。木枠に一〇〇〜二〇〇メッシュくらいの絹の網が張り付けてあって、この絹の上に写真の感光乳剤をさっと塗りつけておく。別の無色透明なフィルムに光を透さない塗料で絵を描きます。そのフィルムを感光剤を塗ったシルクスクリーンの上に重ねて感光させます。写真の現象と同じで感光させたシルクスクリーンを水で洗うと、光の当たったところは膜が残り、光の当たっていないところは感光剤が取れてしまう。つまり光を透さない塗料で描いた絵の部分だけ絹目が出てきます。その他の光が当たらなかった所は乳剤によ



シルクスクリーンによる版画

って潰れてしまっています。だからここにインクを入れて、スキージつまりへらのようなものでインクをスクリーンの上に伸ばすと下に敷いた紙にインクが乗ります。それを別々のスクリーンで色ごとにやると結局、皆さんも恐らくシルクスクリーンと云う言葉をお聞きになったことがあると思いますが、多色のシルクスクリーンの作品が出来ることになります。そのサンプルがこれです。私がやったものですが、至極下手くそな絵です。

（客席からの孔版や凹版について質問がある。）（エッチングについて）それは腐食で出来た溝の中にインクが溜っていて、それに紙を当ててロープレスでぎゅっとプレスしてゆきます。すると紙はプレスで押わりますから、溝の出来ている所で少し沈むことになります。する

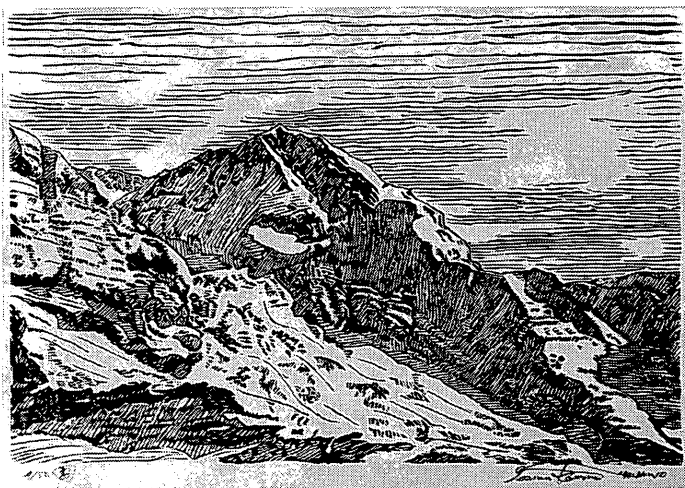
と溝の中に溜っていたインクが紙に引付くということになります。孔版については、今のシルクスクリーンを見て戴くと分かりますが、これが黒の版でこちらが黄色の版。これは刷り損ったもの、紙を当てるのを逆さにしてしまつて、あつ、しもうたと。

今までに述べた四種類の版画のうちで一番普通に使われているのが平版で、皆さんはリトグラフという名前で聞いておられると思います。石版刷りのことです。石版の石は特殊の石灰石ですが、今ではジンク板やアルミ板が使われます。リトグラフの原理は少しややこしくて、私はこれだけはやったことがないんでよくわからないのです。ほかは少なくとも一回か二回は経験があるんですが。リトグラフのやり方というのは、水と油の性質が相反するという原理を使つてある。例えば、紙の上に何か絵を描きます。クレヨンのような油性のもので絵を描く。その上にアラビアゴムをすつと一面に引く。アラビアゴムは水性だから絵を描いた処だけはアラビアゴムが乗らないで、あとの部分には乗ることになります。その後乾かして、今度はガソリンで拭くと、前に油性の材料で絵を描いた所が取れてしまうことになります。さらに絵が消えたあとにチンクター（アスファルト粉末、蜜ろう、牛脂を混せて作った親油性の粘液）その他の親油性の強い液体を塗ります。これらの液体がよく乾いてから、スポンジに水をつけて版面のアラビアゴムをよく拭き取ると、初めに絵が描かれていた部分のみにチンクターなどが残ります。そこで、この版を水で拭いた後、ローラーで製版インクをもる。水で濡れたところにはインクが付かないで、チンク

ターの付いた所のみにインクが付着します。そのあと、版の安定処理をして製版が終了します。つまり、水をはじく絵の部分と水をはじかない絵でない部分よりなる版が出来たことになります。これを色ごとに作ります。この版にローラーで夫々の色の油性絵具を盛り、プレスにかけて紙に刷れば絵が出来上がる、と云うような原理らしいのですが、かなりややこしくて、私など本を読んでもよくわからないんです。それでも、この平版が一番一般的なやり方になっていて、それをみなコンピューターでコントロールしてやるらしいです。新聞なんかでもオフセット印刷でもそうです。シャガールのリトグラフなどはもともと石版刷りです。今までに話しましたように、版画には四種類あることを覚えておいて戴くと、何かの時に「ああ、あれはリトグラフだなあ、それは木版画だなあ」いうことが分かって、興味が湧くのではないかと思います。

私が入った版画教室では、最初に教えてくれるのは、水仙の花を彫ることでした。一番始めは水仙の輪郭だけを彫ることです。輪郭を彫り上げたら、黒い墨で刷るのですね。それが出来たら次に五色なら五色の、浮世絵のところでお話しましたように、五色刷りで水仙を刷ってみる課題としてやらされるんです。

その次は、自由な課題で墨絵をやります。墨だけの絵………今日は私の版画の軌跡をお話しているのですが………（アルプスの版画を見せる）。これが私の墨で刷った最初の作品です。これは、アルプスの、この辺にユングフラウがあって、これが氷河です。ところがやってみると、



木版画・アルプスの氷河（横40cm×縦27.5cm）

白黒の絵というのは非常に難しいんです。と云いますのは、この濃いところと薄いところを二回で刷れば訳ないのですが、一回で刷れと云われると、後は彫り方で濃淡を全部出さなければならぬし、この雲の格好も作らなければいけませんで、絵の上手下手が非常によく分かるんです。白黒の絵が上手に描ければ本当に大したものです。ところが私は、絵が上手でないからなかなかそうはゆかず、困っております。

下絵を描く時には、画用紙を木の枠に水張りします。理科の人には分かるでしょうが、そうしませんと、多色刷りの場合、下絵を色ごとに夫々の版木に写し取るのですが、湿気や何やらで紙が膨張してズレが出来ることになります。それ故、湿気やその他の影響がないように画用紙を水張りして、その上に下絵を描きます。

次に作ったのが、これも白黒の版画ですが、この白黒は、これをもとにして多色刷りになるんです。……………（ここで修学院離宮の下の御茶屋寿月観の秋の版画を見せる）……………だからこのアルプスの絵はこれだけで完成し、こちらの寿月観の庭の絵は少し違っております。塗り絵と同じようですね。墨で描いておいて、後から色を入れていった。前に話しましたように、昔の浮世絵も一緒なんです。で、この寿月観の絵は色としては十五色くらいです。ですから版も十五版くらい彫ることになります。それで多色刷りの時にどうやって絵を合してゆくかと云うことなんですが、例えばこの絵を……………（ここで洋画の大きさで十号位な神戸の北野の異人館の坂道の絵を見せる）……………これは私の最近の絵です。これもやはり十五・六色の絵です。……………（さらにここで一枚の版木を見せる）……………これはシナベニアに彫った版木です。先ず最初に全体的に暗い部分を刷のですが、（絵を示しながら）下地に暗い色が刷っております。この版木に刷る順番から云えば三番目に刷る色がこの版木に彫っております。それで後で廻しますが、（版木を見せながら）ここここに印が入っています。版木の右下に「かぎ印」が、下側の $\frac{2}{3}$ くらいのところには「一」が浅く彫っております。これらの印は下絵にも付けてあり、どの版木にもこの印を写しとって彫り込んであります。色刷りをする時、紙の右下の角を版木の右下のかぎ印に合せ、さらに紙の下の辺を版木の——印に合せて紙を版木にパッタと置く訳ですね。これらの印を「見当（ケントウ）」と云います。「見当をつける」の「見当」という字です。こう云う方法を考え出したか

ら多色刷りが可能になったのです。さきのかぎ型の見当を「かぎ見当」、後の「一」印の見当を「引きつけ見当」といいます。錦絵で鈴木春信が一七五〇年の頃ですか、多色刷りを始めたと言われています。実際は春信が考えたのではなさそうですけれども、その頃に誰かが考えて、そのお蔭で今多色刷りが出来る訳です。

木版画のやり方を具体的に説明しましょう。これを元絵としますと、一番初めにこれを何色でやろうかと考えるのですね。色数が決まるとそれで色ごとの版木を作るのですが……（元絵を複写した透明の薄いフィルムを見せる）……これは元絵を写したフィルムです。マイラーというフィルムです。伸縮性が非常に小さく絶縁性があつてモーターのコイルなんかの絶縁材料にも使っております。前にお話したように元絵は木枠に水貼りしてありますが、その元絵の上にマイラーを当てて元絵を写します。この元絵を写したマイラーを版木に当て、カーボン紙を間に挟んで、前に決めた色ごとに版木に絵を複写するのです。十五色なら色ごとに十五枚の版木を作ることになります。版木に写すときは裏向けに写します。そして版木を彫ればよいことになります。……（質問に答えて）マイラーはトレーシングペーパーでもいいですけれども、鉛筆で絵を写します。それを裏向けにして版木にあててカーボンペーパーを挟んで赤色なら赤色のところだけを描きます。それを版木に写しとった赤色になる部分を残してそれ以外のところを彫り取ってゆきます。棟方志功さんなんか、あの人の版画は黒一色で、トレーシングペーパーなど使わない

です。場合によっては、左右逆さの絵をささきと描いて、そのまま彫ってゆく、だから、ああいう天才の方は別なんですけれども、普通我々素人は説明したように彫ってゆきます。

版画に使用する紙は和紙です。色々の和紙があります。厚いもの、薄いもの、原料による種類、すき方の違い。この絵に使っている紙はそう上等のものではありません。このF一〇号位の絵の大きさ二枚とれるくらいの紙で一枚五十六〇〇円くらいです。和紙もやっぱり天候によって非常に伸縮しますから、色刷りをするときは水で湿らします。普通私たちがやるのは数枚のボール紙に水刷毛で水を掃いて、その間に使う和紙を挟んで置きます。五枚なら五枚を湿ったボール紙の間に入れておく。そうして、一〇分位すると紙が湿ってきます。湿ると紙が伸びて、伸びが大体一定してきて色刷りのときのずれがなくなります。また絵具の付きもよくなります。次いで、色刷りに入ることになります。版木に刷毛で絵具を付けて湿って伸びた紙をさきにお話ししたように見当に当ててこのように版木の上に置きます。そうして、バレンで紙の上から刷ると紙に絵具が付いて絵が出来あがってゆくことになります。紙が濡れて柔らかくなっているの、紙を版木の上に置くのは慣れないとなかなか難しいんです。普通、こーやって持ちますけれども、（両手で紙をもって、見当に当てて版木の上に紙を置く動作をして見せる）……濡れがひどいと紙がべたっとお辞儀してしまう。それで紙がうまく版木に乗らないでずれてしまいます。初めのうちは何回も失敗して紙をおしゃかにしてしまいました。そういう時にはもう一枚薄い固い紙を裏に

当てて持つとか、色々工夫してやっております。（「紙の湿り具合で様子が変わってくるやないか」という質問が出る）……紙の湿り具合と言っても、定量的にはどうか知りませんが、勿論あまりべちゃべちゃになっては駄目ですが、どうもこういうカーブで（飽和曲線を描いてみせる）伸びがサチュレートするみたいな感じなんです。紙もある程度生物だから、あまり無茶したら駄目になってしまいますがね。

ここに彫る道具があります。これは普通の彫刻刀で、案外安くて一五〇〇円位です。よく切れます。あと、色々の彫刻刀がありますが、こういう風な三角刀、これは割合に高くて三〇〇〇円位。（「刀が擦り減って来たらどうするんや」と云う質問が出る）三角刀は研ぐのが非常に難しい。これは専門屋に研いでもらう方がよい。大体一本二五〇円〜三五〇円位で研いでくれます。ところが丸刀は慣れて来ると自分で研げますよ。私は三角刀以外は全部自分で研いでいます。砥石をこう置いて研ぐ。すると砥石に丸い溝が出来る。そういう条（すじ）のついた砥石をちゃんと売っています。それから、見当を彫る時に使うのがこれです。「見当のみ」といいます。四〇〇〇円位します。プロの使うのはもっと高いだろうと思いますが、だいたい研ぐことが出来るものは一本三〜四〇〇〇円位はします。しかし、五本セットで一五〇〇〜二〇〇〇円位のもので結構使えます。

木版画には色々の道具があります。この竹の皮で包んだ丸く平たいのはバレンといって、絵を

刷る時に絵具を塗った木版の上に紙を当ててこれを刷るんです。バレンは殆ど竹の皮でできています。竹の皮を細く裂いて十本なり八本なりを撚って紐にする。竹の皮の紐です。その紐を、薄い和紙を五〇枚くらい貼りあわせてさらに布をあつて漆など固めた円盤の上に、竹の皮の紐を渦巻き状に巻き、全体をさらに竹の皮で包んであります。これにも上等と安物があり、芯が紙紐、木綿紐、ナイロン紐、麻紐など色々なものがあつて、安いものは三〇〇円くらいから売っております。この私の使っているのが八〇〇〇円くらいです。プロが使う本物はやっぱり二万円、三万円します。傷んだら、上に巻いてある竹の皮を巻きなおしてもらえば、何回でも使うことができます。私は二つか三つしか持っていないませんが、プロは五つも六つも持っていてやっています。（「竹の皮を使う。何か効用があるのか」と云う質問あり）結局湿気に強いのと、刷っても割合丈夫であるということもありますが、肝心なことは、竹の皮を撚りあわせた芯は凸凹が大きく、大きい圧力を紙に加えることが出来ます。撚り合せの数の多い芯のもの、少ない芯のものなどで凸凹の大きさの違いを利用して、微妙な刷り方ができます。刷る時は油をしませた布にバレンをこすりつけて油をバレンの面につけて刷ります。

道具の説明ばかりしてしまいますが、版木に絵具をつける時はこういうものを使います。これはいわゆるブラシ型の刷毛です。丸刷毛です。こういう手刷毛型のものもあります。（色々の形や大ききの刷毛を見せる）。特長というか大事なことは、まず毛が抜けないこと。板の上に絵具をつ

けるとき毛が抜けたら、刷るときに毛のところは絵具の付き具合が変になってしまう。次ぎに絵具をよく含んでくれること。適当な腰の強さがあること。皿の中に絵具をときまして、これもやっぱり竹の皮で出来た「とき棒」という竹掃帚の子供のような道具で、絵具を運ぶから「運び」などともいいますが、こういうもので絵具を刷毛に含ませて、版木に絵具を乗せるんです。「その毛は何の毛ですか」という質問）これは馬の毛だと思えます。これは三寸刷毛ですが大体五〇〇〇円位します。案外高いものですね。また、色刷りをするとき、絵具の付き方をよくするために多くの場合糊を使ったりして、色の乗り具合を加減します。

まあ、こういうものを使いながらやっているんです。そういうことをやりながら作った私の作品を見て下さい。（色々作品を見せる。）これはさっき話した京都の修学院離宮の下の御茶屋の寿月観の紅葉、絵の大きさは約27×38 cm、版木の大きさは約30×45 cmです。次ぎのものはやはり修学院離宮の上の御茶屋の池の景色です。修学院離宮を拝観した時に写真を撮ってきて、その写真をもとにして、絵を描いたものです。絵の大きさは約40×54 cm、版木は約45×60 cmで前のものの大体二倍の大きさです。それからこの絵は、この間、千葉の県展に出していた絵ですが、神戸の北野にある異人館の一風景です。

版画は同じ版木を使って、何枚もの同じ絵を作ることが出来ますが、刷り方によって色が異ってきます。（浮世絵の画集をみせて）同じ版木の絵でも刷り方でこんなに異ったものが出来ます。



木版画・神戸北野異人館の上り坂  
(多色刷 横40cm×縦54cm)

んななかで活躍したのが小林清親（きよちか）月岡芳年（よしとし）などです。なかでも小林清親は「光線画」と云って、日本の浮世絵になかった光と影を取り入れた画風を開発し、従来の浮世絵とは全く異なる様式の陰影法で明治の人々の心を捉えました。

版木ははさきに言いましたように今私などが使っているのは、シナベニアですが、昔は桜の木を使っていた。桜の木が一番いいんです。ところが今むくの桜の木でやろうと思ったら、これく

（「NHKで明治時代最後の浮世絵師が作った版画を使って何か復元したのがあったでしょう」と言う質問があり）誰でしょうか。私は見ていませんが、最後の浮世絵師と云うと、明治になって西洋から写真や石版画が輸入されるになります、それに伴い、浮世絵は急速に衰退してきます。そ

らしいの大ききで何万円もしますから十何枚使おうと思つたら、何十万とかかる。だから私達が使  
うのはシナベニアです。桜やしな（科又は楡）の他、ほう（朴）、かつら（桂）、かえで（楓）な  
ども使います。ラワンなど夫々の木目を利用すれば、面白い作品を作ることができます。自然木  
が段々入手しにくつた今では、「合版」が使われます。中でもしなの合版は木目や木質が比較  
的均一で彫りやすいことなどもあつて使い易い版木です。

今まで話した版木は普通「板目版木」と云うんですが、「木口版木」と云うのがあります。板  
を自然の木から切りだすやり方に二つの方法があります。木を縦に切り出す板目板と木を直角の  
方向に切つた木口板です。板目板で作つた版木が「板目版木」、木口板で作つた版木が「木口版  
木」です。「板目版木」と「木口版木」とでは版の作り方も使用する道具も異なります。木口版  
木には普通「ツゲ（黄楊）」の木を使います。「ツゲ」以外に「カエデ」「ツバキ」など木目の非  
常に細かい木が使われます。むくの大きな一枚板は得難いので寄せ木の板が使われます。（道具  
を見せて）木口木版は彫り方が異つて、こういう「ビュラン」と云う道具で彫ります。これは西  
洋から来たものです。このビュランもアメリカ製です。日本ではあまり作らないそうです。木口  
木版は近世ヨーロッパで發達した技法で、活版印刷が發達するに伴つて、本の中の挿絵を作るの  
に木口木版の版画を使用しました。私の親父はやはり明治四一年の三高の卒業生ですが、本を集  
めるのが好きで、かなり洋書を集めておりました。その一部が私の所に残つていて、その中にあ

つた一八五一年にLeipzigで発行された“Briefe über Alexander von Humboldt's Kosmos”と云う本を眺めていたら、たまたまその頃私は木口木版を習っていたので、「あらっ、ちょっと待てよ」と思つてその本の挿絵をよくよく見ますと、挿絵がみな木口木版画で出来ているのに気がつきました。大正の始めのドイツの本です。…………（質問に答えて）木口木版というのはさつきも述べたように木目が非常に細かくて、板目木版と異つて黒一色ですが銅版画のような緻密な表現ができます。

最後に、浮世絵の頃から現在に至る版画の変遷について簡単にお話します。今NHKで“炎（ほむろ）立つ”というドラマをやっているでしょう。あのドラマの原作者は高橋克彦と云う人ですが、浮世絵の事に非常に詳しく、浮世絵に関する本を沢山書いております。例えば「浮世絵鑑賞事典」とか「北斎殺人事件」「歌麿殺人事件」等々の一連のミステリーものなどもあつて、とても面白くよめますし、読んでいるうちに何時の間にか浮世絵の知識が身に付きます。講談社文庫に出ております。（聴衆との間にやりとりがあつて）、浮世絵は昔は芸術品ではなかったんです。マス・メディアとしていかに広く大衆に売ることが出来るかが目的だった。浮世絵は今の金に直すと一枚三〇〇円位で売っていたようです。しかも、役者の大首絵とか美人画などは俳優のブロマイドと一緒にのです。だから、いかに安く皆の手に渡るかという事です。それで浮世絵が江戸時代から明治時代にかけて日本の大衆文化に尽くした功績は大変なものだったと思います。

浮世絵があつたから、それにつられて浮世草紙を読んだり、里見八犬伝などを読んだりすることが盛んになって、庶民の識字率が非常に高くなる助けになりました。

浮世絵は一七世紀後半、万治年間（一六五八―一六六〇）に菱川師宣（ひしかわもろのぶ）によって始められたと云われております。赤穂浪士の事件のあつた元禄一四年が一七〇一年だつたと思いますが、大体いつの頃かがわかるとと思います。それまでも浮世絵はありましたがそれは肉筆画です。師宣のよつて浮世絵版画が始められました。始めは黒一色の「黒摺絵」でしたが、やがて手彩色の「丹絵」（たんえ）や黒と紅の二色を重ねて摺つた「紅摺絵」（べにずりえ）などができております。明和二年（一七六五）に鈴木春信が多色木版（錦絵）を完成させたことにより、以降江戸時代末期まで約一〇〇年の間に浮世絵は急速な進歩を遂げました。天明年間には美人画の鳥居清長がでて、浮世絵黄金時代の幕開きとなりました。天明といえは、浅間山が噴火したり、松平定信が老中になり田沼意次が没した頃です。寛政年間（一七八九―一八〇〇）には浮世絵の巨匠初代喜多川歌麿や役者絵の写楽が出ております。伊能忠啓が蝦夷地の測量を行なつた頃です。この私の絵を見て戴くと分かりますが、今の版画には浮世絵に見るような黒い輪郭の線が殆どありません。實在のものには輪郭の黒い線などはありません。輪郭はバックや隣のものとの色の相違によつて区別出来る訳です。浮世絵でも歌麿は彼の描く美人画の白さや柔らかさを現すためにバックの黄潰しの色とか用紙の越前奉書の白さなどを利用した没線の方法を工夫しております。

文化文政年間（一八〇四―一八二四）には風景画の北斉が、天保間保（一八三〇―一八四三）には初代歌麿広重が活躍しております。北斉の「富嶽三十六景」は余りにも有名です。北斉が一枚絵を描いたのは六〇才以降だそうで九〇才で没しています。「北斉漫画」は今の漫画の概念とはひどく異なっておりますが、人物、草木、鳥獸、虫類、鳥獸から建造物、武術などが版画に収められて、絵の手本のようになっています。歌川広重には「東海道五十三次」や「近江八景」「名所江戸百景」などの作品があつて、皆さんのよくご存知のところですよ。文化文政の頃から幕末にかけて政治に陰りが出てきた頃になって、かえつて浮世絵は隆盛期を迎えております。

しかし、幕末から明治初期にかけて西洋の文明の到来に伴つて輸入された写真や石版画などの新しいメディアに押されて、木版画は次第に衰退を余儀なくされてゆき、逆に異国情緒として浮世絵は大量に西洋に流出して行きました。これらの流出した浮世絵が皮肉にも却つてヨーロッパの印象派の画家達に大きな影響を与えたことは今になって分かったことです。

以下お話しすることは、美術雑誌「版画芸術七九号木版画百年」やその他の関係図書から借用したことで、興味をお持ちの方はそれらの本をお読み戴きたいと思ひます。

明治に入つて、舶来のメディアに押された浮世絵は新しく興つた新聞の挿絵として役割をかねてゆき、また、日清・日露の戦役は僅かに報道画として刊行されました。明治時代に活躍した浮世絵師の中に前にお話しした小林清親、月岡芳年などがいて従来の浮世絵の中に洋画の手法を加え

て「光と影」を取り入れた「光線画」を開発しております。

明治の中期を過ぎると文芸運動が次第に盛んになり、それに伴い「明星」や「ほととぎす」あるいは「白樺」などの文芸誌が刊行され、挿絵を数多く掲載して、西洋美術を紹介をもするという芸術誌として役割を果たしてきました。その中で山本 鼎、石井柏亭、森田恒友の三人の画家が「方寸」という芸術雑誌を刊行し、新しい版画の概念を提唱し、創作版画の原点をなしております。後に坂本繁二郎、倉田白羊ほかの画家を同人として加わっております。

江戸時代の浮世絵が絵師、彫師、摺師の分業で制作され、版元で取纏めて出版されていたのに対して、創作版画というのは、作者自らが絵師、彫師、摺師の全ての工程を行なうという一つの芸術運動でした。創作版画運動に加わったのは、洋画家が多かったのです。大正期に入ると恩地孝四郎、田中恭吉、藤森静雄などの人たちが現われ創作版画の作品集「月映」を刊行しております。

大正から昭和初期にかけて美術界では数多の団体、同人が結成され、「春陽会」と「国画創作協会」がこの時期に結成されております。「春陽会」は大正十一年に山本 鼎、森田恒友らの日本美術院洋画部のメンバーと、岸田劉生、石井鶴三、中川一政らの草土舎のメンバーが集まって結成され、昭和三年に版画室が設けられました。これに対して、大正十五年に京都の日本画の国画創作協会が洋画部を開設し、後に日本画部が解散した時、残った洋画部は「国画会」として新たにスタートしました。この時、同時に版画部が設置され、平塚運一を始め、恩地孝四郎、川西

英、川上澄生、棟方志功、徳力富吉郎、畦地梅太郎、笹島喜平らが参加しました。以降、この二つの流れが版画活動の大きな拠点をなしておると言えます。昭和二年の第八回の帝展にやっと創作版画を受理されるようになっております。

このようにして、創作版画は黎明期の作家達の努力により帝展にも参加できるようになりましたが、芸術として実質的に認められるようになったのは、漸く戦後になってからのようで、棟方志功、斉藤清、山口源らの作家の国際的な活躍からです。第一回のサンパウロ・ビエンナーレ（一九五一）で斉藤清と銅版画の駒井哲郎が日本人賞を受賞したのを皮切りに、第二回スイス・ルガノ国際版画展（一九五二）で棟方志功、駒井哲郎が優秀賞を受賞、さらに第三回サンパウロ・ビエンナーレ（一九五五）で棟方志功がグランプリを、つづいて第二十八回ヴェネチア・ビエンナーレ（一九五六）ではやはり棟方志功がグランプリの榮譽に輝いており、国際的評価を揺るぎないものになりました。つづいて、第五回ルガノ国際版画展で山口源がグランプリを受賞し、その他吉田政次、関野準一郎、吉田穂高、吹田文明らが後に続いております。このようにして、創作版画は芸術の一ジャンルとしての存在を確立してきましたが、近年の印刷技術の急速な進歩によって、近代版画のもつ芸術性と複数性を共有すると云う特質が大きな転換期を迎えるに至っているとも云えるそうです。以上、経験不足と勉強不足で至らない点が多かったと思います。が、今後版画を御覧になる時に少しでもご参考になればと思います。